

釣れ釣れなるままに

2012年思い出の釣行記 PART. 1

異常気象 鹿島釣狂

岩見沢釣遊会総会

平成24年度総会が1月21日、「三日月」で開催された。頭に白いモノが混じるというよりは、少なくなってきた会員ではあるが、岩見沢地方を襲った豪雪の中、皆元気で顔を合わせることが出来た。総会では事業報告、会計決算報告等が承認され、新年度の方向性も決まった。また、岡 英成氏、島 強二氏が新会員として名を連ねてくれることになり嬉しい総会ともなった。

懇親会では、年間入賞者を表彰しながら酒を酌み交わし、前年度のねぎらいと新年度の抱負を語り合った。年間優勝者は昨年度に引き続き嵐 光博氏で、栄えある優勝旗を前野会長より手渡された。嵐氏は総合優勝3回、年間5回合計8点、7回合計16点、平均1211点をたたき出すなどダントツの優勝だった。彼には名誉名人位を与えて会員の指導にあたってもらい、年間優勝争いからは引退してほしいところだが、そうもいくまい。嵐氏も含めて年間優勝を渡さないぞと各会員が競ってこそ、釣りの技量も上がっていくものと思われる。特に今回入会した島氏、岡氏がその地位を脅かしてもらいたいものだ。

準優勝者は吉井氏で惜しくも嵐氏の後塵を拝してしまった。5回までは嵐氏と同点数で争っていたのだが6回大会で風邪をこじらせて参加できなかったのが災いしたものと思われる。特筆されるのは琴似で1704点という歴代最高得点をたたき出した前野会長のことだろうか。琴似に集まる会員が多くなってきているがその恩恵に与るには技量というより経験が足りないというところか。

魚種別大物賞部門では45cm超えがアブラコ49.6cmの吉井氏、カジカ46.6cmの前野氏、アカハラ46.4cmの嵐氏と順当なところか。ガヤを山岸氏、カンカイを谷口氏が獲得したがこれも順当なところか。「なんだこんなチビで」とは言えないので「大物おめでとう」と祝福しておこう。ソイ、タナゴ部門は提出者がいなかったが年間魚種別大物賞

を狙うためには、多少小さくても提出さえしておけば可能性が大きいというところか。年間優勝には見込みがない私は、24年度のこの部門を狙ってみようと思う。



年間総合優勝 嵐 光博氏



懇親会風景

さて、24年度の大会が4月から幕開けするが、今から大海原に思いを馳せ、仕掛けに工夫するなどして迎えようではないか。「春よ来い。早く来い」

岩見沢を襲った豪雪

集合場所に指定した駐車場には、豪雪に見舞われた名残ともいえる雪がうずたかく積もっていた。今年の岩見沢は記録的な大雪に苦しんできた。しかも、岩見沢市だけが集中攻撃されているようにも感じる。雪解けのあとの庭には、うずたかく積もった雪の重みに負けて庭木がへし折れてしまっていた。雪囲いなども一緒に押しつぶしていたのだ。

岩見沢市と言えば、道内でも屈指の豪雪地帯である。それにも増して、2011年の1月と12月、2012年の1月の積雪量は尋常ではなかった。記録的豪雪で朝除雪しても夕方勤務から帰ってくるともう一度除雪しなければならない状態が何日も続いた。市の除雪車も排雪に手が回らないで、路線バスが市内全便運休する日が出る等、市民の生活を圧迫した。市内を貫く国道12号線は両側に高く雪が積り、歩道は背丈よりも高い壁に挟まれた通路を通ることを余儀なくされ、市内の一部で片側一車線にならざるを得ない場所も発生して渋滞している始末だ。私が通勤に使っている比較的広い農道もご多分に漏れず1車線となり吹雪と重なると一寸先も見えなくなり交通事故も多発した。おまけにどうしても通らなければならない踏切の遮断機が故障して、前に進むのも後ろに戻るのもままならず、通勤を断念せざるを得ないこともあった。そして何台もの車が除雪車が来るまでここで立ち往生してしまったのだ。これまでの最深積雪の記録は1970年3月22日に記録した180cmが最大だったわけだが、約42年ぶりにその記録を塗り替えて、観測史上最高となる208cmに更新したということだ。



背丈よりも高い雪壁になった歩道（岩見沢市ホームページより）

それでも何とか春になった。大会前数日間には温暖な気候が続き、釣り大会情報でも春の兆しが見えてきている。不調だったホッケも岸寄りしてきたようだ。天気予報も上々でべた風過ぎて釣果が思わしくないかもと心配されるほどだ。第1回大会ということで皆が幾分華やいだ気持ちで集合してきた。

藻岩岬での順調な滑り出し

4月22日の第1回大会では釣り場を藻岩トンネル前の岩場にと早々に決めていた。前年度、下見をしてきており、竿は出さなかったもののなかなかの好感触を得ていたのだ。岩場の先端へのルートも確認している。

バスから降りて、難所を越えながら目的の岩場を目指して進んでいると、足下がおぼつかなく転んでしまった。すると後ろから2個のヘッドランプが揺れながら近づいてくる。一旦、重いリュックを置いて、竿袋だけを担いで先へと進む。それでも私との距離はみるみる縮まってくる。何とか先端を確保することが出来、私を挟むように2名の釣り人が並んだ。時計を見ると午前0時をまたぐ前に釣り場に到着していた。

本日は日本海なので25号竿でホッケ仕掛2本を近投、1本を遠投して広範囲を探った。その遠投の第1投で35cmほどのアブラコとホッケがダブルできた。幸先がよく力が漲ってくる。しかしその後が続かなかった。ホッケが1本釣れたのみでダンマリを決めこんでしまった。ドン深でいかにも大物ソイが潜みそうな磯場だったが、ソイの引き釣りは両隣に迷惑をかけるといけなないので控えざるを得なかった。そして、ホヤを持ってきたことを思い出し、合い掛けをしてみた。このホヤは北海道産とあり、固い皮に覆われてどのように使うのがよく分からなかったが、半分に切ってみると硬い殻の中にオレンジ色をした柔らかい身が付いており、殻はきれいに剥けてきた。それを適当な大きさに切ってカツオと一緒に付けてみたのだ。それに、本日の婿となったアブラコが来た。エサ持ちもよいようだ。30cm程のクロガシラもこれに食いついてきた。

規定の魚を釣ったところで少し余裕が出来て隣と挨拶を交わすと、小樽名人会のK氏とT氏だった。連盟小樽支部の大会が同じ区間で開催されており、この場所には初めて来たとのことだった。釣果の方は似たようなものだった。

突風？いや竜巻だ！

釣った魚をフラシに入れて潮だまりにつけていると突然、生温かい風が吹いてきて、穏やかだった海面がざわついてきた。風で煽られた波飛沫が渦を巻いて上昇していく。その渦がいくつも出来て、磯に近づいてきた途端に激しい嵐が襲ってきた。竜巻だ！ 慌てて竿尻を懸命に押さえる。風で煽られて今にも体が吹き飛ばされそうになった。三脚を低くして、竿先だけをようやく立てかけた。するともう一つ大きいのが渦を巻いてやって来た。自分は岩壁に張り付いて身じろぎ一つ出来ない。リュックが飛ばされていく。バツカンも宙を舞った。まだ飲みかけだったペットボトルがゴトゴトと動いた途端にフッと見えなくなった。



この穏やかな磯に突然竜巻が襲った

アメリカ映画『ツイスター』の映像が頭をかすめた。『ツイスター』はアメリカの竜巻多発地帯を舞台として、竜巻に極限まで接近し、危険な観測に挑む竜巻研究者夫婦の姿を描いた作品だ。自分の六十余年の経験でも、小学校の運動会の日グランドでつむじ風程度のものしか見たことはなく現実的ではない異常さを感じた。しかし、道内でも竜巻による被害が頻りに報道されるようになり身近に異常気象の兆候を感じるようになっていた。最近では佐呂間町を襲った竜巻被害のことが思い出される。トンネル工事中で作業員用のプレハブ小屋が屋根もろとも突風に吹き飛ばされて9名もの犠牲者を出した痛ましい災害だった。テレビ画面を通して報じられた現場は、大型トラックがいとも簡単に吹き飛ばされたり、電柱も根元から倒されたりするなど竜巻のすさまじさを物語っていた。今回私が体験した竜巻の規模はそれほど大きくはないと思うが、恐怖を感じたのは紛れもない事実だ。



少し風が止んだところで写真に納める

風が止んだ。私の竿は無事だった。左隣のK氏は竿がなぎ倒されて岩に宙ぶらりんの格好だった。右隣のT氏は、飛ばされた私のリュックを拾って届けてくれたのだが、そのT氏の3本の竿が田村式三脚と共に海中に見えなくなってしまったという。スピンパワーを使っていたはずだからどれほどの被害になるのだろう。及ばずながら私が仕掛の付いた竿をもって駆けつけたときには、彼の相棒がそのスピンパワーを助け上げたところだった。

明け方の一瞬の出来事だったので、まだ締め切りまでには時間がたっぷりとある。これから釣りを続けるためにもT氏に「三脚を2つ持ってきているので貸しますよ」といってはみたが、T氏は「竿の方は折れることもなく何とか回収できたのだが、心の方は折れてしまった。こんな時は何をやっても駄目なものだ。」と相棒と共に早々に引き上げていった。私はその後も穏やかになった海に向かって何度も打ち込んでみたが魚の反応は全く無くなってしまっていた。魚たちも地球の異変を感じたのだろう。

審査結果

優勝	鹿島釣狂	1119点	(アブラコ421mm+ホッケ 368mm+3300g)	藻岩
準優勝	前野達志	985点	(アカハラ396mm+ホッケ 363mm+2260g)	最内
3位	嵐光博	977点	(ホッケ 395mm+アカハラ372mm+2100g)	最内
4位	吉井博	893点	(アブラコ382mm+ホッケ 351mm+1590g)	弁天岬
5位	岡英成	886点	(アカハラ379mm+アブラコ350mm+1570g)	三軒町
身長優勝	堀内正博	1051点	(アカハラ396mm+クロガシ353mm+3020g)	瀬棚港



6. 本日の釣果

審査の結果、凶らずも私が優勝だった。準優勝の前野氏、3位の嵐氏は共に最内川に入った。1週間前の北海道釣り名人会の大会では数は少ないものの50cm台のアカハラが出たという情報を聞きつけて狙ったのだが、残念ながらその超大物には巡り会えなかった。しかし、さすがに両名とも良形のアカハラやホッケをきっちりと揃えてきていた。背後からの砂嵐に耐えながらの釣りだったらしい。

身長優勝は、堀内氏である。昨年 of 太櫓川河口での苦い経験から酒を控えての瀬棚港だった。堀内氏十八番の港内で大物のアカハラを4本揃え、年間魚種別大物賞候補となるクロガシラを嫁としたのだ。総合では2位となる点数をたたき出した。

西川氏がソイとハチガラを釣ってきた。婿となる38.6cmカジカは問題ないのだが、嫁に何を選ぶのかに興味を湧いた。身長に勝るホッケだろうか。それとも年間魚種別身長賞の可能性を含んだハチガラやソイだろうか。彼が選んだのはハチガラだった。ホッケを選んでいれば100点ほど増え入賞間違いなかったところだが、年間総合の方は早々に諦めてしまったのだろう。それならいっそのこと婿の方もソイにしておけばよいものを……。彼の事なので「年間優勝の方はあと6回もあれば戦うことが出来る」と豪語しそうだが、そううまくいくのだろうか、奮闘を祈っている。